

## 令和5年度「土砂災害防止に関する絵画・作文」作文中学生の部 優秀賞(事務次官賞)

「自分の命を守るために」

岐阜県 高山市立朝日中学校 3年 高原 百香

近年、土砂災害による被害をニュースなど目にするが増えたと思う。原因は地球温暖化による台風や記録的大雨だと思われる。全国各地で発生する異常気象の被害を予測したり、被害を最小限にしたり、もし起きてしまった場合どう対処したらいいのだろうか。私は、このことについて痛感する出来事を体験した。

3年前の7月、雨が降り続き、一夜にして近くの川が氾濫した。夜中、川からは石がゴロゴロと大きな音を立てて流れていた。地域の住民はそれぞれ高台へと避難し、私も家族と避難した。翌朝、私は、変わり果てた光景を見て驚いた。家の前の道には泥水が溜まり、物が浮いていた。川の土砂が家に流れ込み泥だらけになった。山に覆われた地域のため、至る所で土砂崩れが起きた。高山市内と繋がる唯一の道も塞がれ、私達は孤立状態になっていた。私は、1日で自然の怖さを知った。幸い、死傷者は1人も出ることはなかった。この経験を通して私は、2つの事を感じた。

1つ目は、自分の災害に対する意識の低さだ。普段、見ていた川は水位が膝ぐらいまでしかなくまさか数メートルもある堤防を超えることや、道が塞がることなど想像もしていなかった。そのため、備蓄や避難経路、避難場所の確認が甘かった。また、ニュースなどによる降水量の予測など自然災害を自分とは、程遠いものと考えていた。「自分は大丈夫」や「自分には関係無い」そんな気持ち心がどこかにあったのだと思う。だから、避難指示発令後もすぐには行動をしていなかった。実際、これまでに日本で起きた他の災害でも、亡くなる原因として一番多いのが、自分事として捉えず、判断が遅れ、逃げられなくなってしまうことだそう。

このことから私は、災害が起こる前に大切なことは、考え方を「まさか」から「もしかしたら」に変化させること、これが被害を最小限にすることに繋がると思う。

2つ目は、災害が起きたからこそ気づいた人の温かさだ。避難所では、全員が助け合いながら生活をしていた。お互いに人に声をかけ、体調を気にかけていた。避難指示が解除され、家に戻った後には、泥だらけになりながら、何日も近所の人、知り合いの人が作業を手伝ってくれた。作業は、何日も続き、日に日に人が増えていき、家族の顔も人に会い、話したことによってか不安を感じる顔から、笑顔に変わっていったように感じた。たくさんの方がかけつけてくれたことによって、作業は格段に進み、体力的にも精神的にも助けられたと思う。

数日経つと、道を塞いでいた土砂も撤去され、食料なども届くようになった。止まっていた、水道や電気も元通りになり、ようやく前の生活に近づいた気がした。家の前に車が通るたびに、「状況はどうか」「大丈夫か」などと声をかけてくれる人が何人もいた。聞かれた祖父は、「おかげさまでな、なんとかなんとかなると」「お前のところはどうか」と返していた。どこの家も大変な状況だからこそ地域全体で助け合い、声をかけ合い一方向の関係ではなく、双方向な関係を築いていた。

このことから私は、災害が起きた後に大切なことは、普段より声をかけ合い、助け合い、人との繋がりを強く持つことだと実感することができた。

その後、災害を経験して地域全体で防災に取り組み、避難場所や、備蓄の見直しが行われた。新しく砂防ダムがいくつか建設され、今後の災害で被害を小さくする手立てが考えられた。

私は、災害を通して、自分の命を守るためにどうしたらよいか再確認することができた。大変なことのほうが多かったが、たくさんの方が気にかけて、助けてくれたことで、人の繋がりが大切なのだ、教えてもらえたと思う。自分1人でもできること、人がいるからできることを今後も大切にして生きていきたい。